

令和5年度 幼児教育研修（年齢別担任研修4歳児・第1回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

日時：令和5年5月12日（金）15:00～17:00

会場：ギャラクシティ 多目的室1・2

講師：東京都立大学 准教授 田中 浩司 氏



4歳児の 特徴

いっちょまえの3歳児（自分を主張する）から、少しずつ自分のまわりが見え始めプレッシャーを感じたり、新しいことに不安を感じたためらったりしながら、大人の世界に一步踏み出していく姿が見られるようになります。

自分を客観視できるようになり、まわりと比較したり、まわりを気にするようになる。

〇〇しながら〇〇する。（例えば、紙を回しながら切る。）鉛筆を細かく操作できるようになり、塗り絵の線からはみ出さずに注意深く塗れるようになるといった複合的な動作ができるようになる。

生活や遊びの見通しがもてるようになった分、はじめてのことに不安を感じるようになり、分からないことはやりたくないと躊躇する姿も見られるようになる。



4歳後半になると、〇〇名人、〇〇博士など技を楽しんだり、表現を極めたりと、遊びが今まで以上に広がっていく。

できる・できない。など二分法で、物事を捉えてしまうことがある。

保育者は、できているところを丁寧に伝えることで、子どもが安心する。



自分の気持ちに整理がつかない時、友だちが言ってくれた言葉で納得ができ、気持ちがつくられていくときがある。



（一緒にいることで安心感があり）いつも同じ友だちと連れ立って遊んでいることが多く、人間関係が固定化しやすいが、成長とともに関係性が変化していく。

日常会話は完成に近づいてきているが、状況を理解することや、シチュエーションをイメージすることが難しく、分かっているようで分かっていないこともある。

活動の入り口は丁寧に知らせていく。

■ やりたくないの向こう側の気持ち ■

やりたくない!

いやだ!



集団遊びに参加せず隅のほうで見ていたので誘ってみると、「いやだ!」「やらない!」という子。初めての活動に消極的な子…。その子をよく見てみると、本当にやりたくないのか、または、本当はやってみたいけれどやり方や、何が始まるのかが分からず不安になっているのかもしれない。

保育者は、子どもが「やりたくない!」といったときのまなざしを見たり、気持ちを推測したりすることが大切です。その時の子どもの気持ちを知っているだけで、関わり方が変わってきます。

子どもが夢中になれる保育とは

ポイント

・大きなことに取り組むのではなく、ちょっとした子どものつぶやきを実現していく。

(図鑑を見ていると・・・)
ダンゴムシって、積み木をモザイク状に並べると積み木の間を右、左、右・・・って歩くんだって・・・
えー本当??

遊びの中で子どもの「えー本当?!」を引き出す。



子どもの声を実現する。



じゃあ やってみよう!

「おもしろいなー。」「楽しいね。」を味わう。



「こうしたらもっと面白いかも?!」と遊びが発展する。
(多様な道具や素材を用意する。)



「うまくいかないなー?」と自分がイメージしたとおりにいかないこともある。(保育者がさりげなく手助けをする。)



成功と失敗の繰り返しの途中で、積みあがっていく。

まよめ

保育者は子どもの遊びを引っ張らずに、子どもの向こう側にあるものを理解し楽しみながら保育実践をしていく。

4歳児のごっこあそびの特徴

友だちと一緒に遊びを考えているが、セリフよりも、**枠ぐみ**(「〇〇が〇〇やってさ〜。」など)を話していることが多い。子ども同士でのイメージの共有がまだ難しいため、トラブルになることもある。

そんな時は...

保育者は、単にトラブルを解決しようとするのではなく、**イメージを仲介してあげることが大事です**。「何をしているの?」ではなく、「大きな川みたいだね。」と具体的な言葉で知らせると、子どもたちはイメージを共有しやすくなり、ごっこ遊びが広がっていきます。まずは、**子どもの思いを実現させていくこと**。そして、**保育者も子どもたちと一緒にあって、面白がることも大切です**。

5歳児になると、セリフのやり取りでイメージが伝えられるようになるよ。



研修生の報告書より

給食の時、苦手なおかずがあり食が進まない子がいる。今までは「一口でいいから味見してみよう」と苦手なものを食べてみることでばかりに気を取られていた。研修の学びを活かし、まずは食べられたおかずやご飯に対し「ここにあるおかず、ピカピカにできてすごいね」と伝えてみた。すると「じゃあこれも食べてみる」と苦手なものを自分から食べてみようとする姿が見られた。

大縄に挑戦した時のこと。数回でつまらず子の元気がなくなってくる姿が見られた。研修を思い出し、「今4回も跳べたね」「大きなジャンプじゃうずだったね」などと具体的に良いところをほめると、笑顔が戻り再び列に並びはじめた。その姿から保育者が言葉にして伝えていくことの大切さを感じた。